

## 1. これまでの整備経緯

### ■立ち遅れている秋田県北地域の高規格幹線道路

- ・秋田県北地域の高規格幹線道路の整備は県内でも特に遅れています。秋田～能代間がつながったのは平成14年、大館と東北道とつながったのは平成25年のことです。現在も能代市二ツ井白神 IC ～大館市二井田真中 IC 間32kmは未開通の状況です。現在の県北地域整備率は64%であり、今も他地域より大きく立ち遅れています。

### ■早期ネットワーク効果発現を目指した現道活用方針の採用

- ・早期に利用可能な道路、早期にネットワーク効果が発現できる道路とするため、二ツ井白神 IC ～あきた北空港 IC 間 18km について現道活用方針(既存道路の局所的な改良により、安全性、定時性、速達性の向上を図る方針)を平成23年度に受け入れ、秋田県自らも現道活用区間の一部区間の整備(鷹巣西道路)を平成24年度から進めています。

### ■日沿道の全 IC 間で整備が始まる

- ・このような折、これまで唯一整備に着手していなかった現道活用区間の二ツ井白神 IC ～小繋 IC 間において、当該区間の交通の安全性と円滑性の向上を図るため、平成27年度から「国道7号能代地区線形改良」(二ツ井白神 IC 部分の線形改良事業)の着手が決定し、現道活用区間も含め日沿道の全 IC 間で整備が始まることになりました。

## 2. 沿線地域の変化

### 2.1 経済社会データからみた地域の変化

#### ■開通沿線の製造品出荷額、企業進出数は増加

- ・県内の製造品出荷額は減少傾向(過去20年で約30%減少)が続いていますが、能代市と大館市の製造品出荷額は、開通前よりも開通後のほうが多くなっています。また、能代工業団地、大館市内の大館・大館第二・二井田工業団地の立地企業数は年々増加しています。これらの増加は、日沿道の開通のみならず、地域特性・資源、産業振興や誘致の取り組みなど様々な要因が相まった結果ですが、開通地域と未開通地域、あるいは開通前後の比較から、日沿道の開通も重要な要因の1つになっているといえます。

#### ■日常諸活動の広域化

- ・平成18年に秋田～能代(能代東 IC )間がつながった能代市では、秋田市をはじめ沿線からの通勤通学者が増加しています。さらに、能代市への通勤通学者は平成7年には秋田市が最南でしたが、平成22年には由利本荘市や横手市からの通勤通学者があるなど、通勤通学流動や買物流動が広域化しています。

### 2.2 地域に大きなインパクトをもたらしている開通効果

#### 2.2.1 直接効果

開通区間は県北地域の生活を支える生命線になっています。

#### ■三次医療施設への救急搬送ルートに

- ・県北地域には地域救命救急センターがないため、秋田市あるいは弘前市の第三次

医療施設への救急搬送が必要になります。能代市や大館市からの域外三次医療施設への救急搬送は、開通区間が救急搬送ルートになっています。

#### ■県北内陸部への石油製品搬入ルートに

・ガソリンなどの石油製品は冬期生活の生命線です。県北内陸部への石油製品は、青森港や八戸港から国道7号矢立峠や狭隘で線形の厳しい国道103号を使って搬入されていましたが、平成25年11月に大館北小坂北間開通後は、開通区間が搬入ルートになっています。

### 2. 2. 2間接効果

#### ■大館市における企業進出・設備投資

・従前より様々な企業誘致の取り組みを進めてきた大館市では、平成23年度に日沿道大館北小坂北間の開通時期が公表されて以降、企業の進出や設備投資が急増しました。日沿道と東北縦貫道のダブルネットワークの形成や北東北主要都市の重心に位置する大館の立地条件を利点とする企業の進出や設備投資を受けて、これらの関連企業や関連産業の進出、さらには能代方面・あきた北空港方面の日沿道の延伸開通を見越した企業の進出によって、大館での産業集積の動きは現在も続いています。平成24～26年度の3年間で、33社が44事業所等を新增設し、この投資合計額は約339億円、直接的な経済波及効果は約674億円、パートも含めると369人の新たな雇用が生まれています。

#### ■秋田県北地域のリサイクル産業の発展

・「秋田県北部エコタウン計画」のもと、鉱山関連基盤を活かした家電リサイクルやリサイクル製錬拠点形成、林業からの廃木材と廃プラスチックを活用した新建材製造、石炭火力発電所からの石炭灰と廃プラスチックを活用した二次製品製造など、県北部9市町村の地域資源を活かし地場産業が連携して環境・リサイクル産業の創出に取り組み、環境・リサイクル関連企業の製造品出荷額は毎年堅調に増加しています。特に、日本国内のみならず東南アジアからも携帯電話等廃棄物を集荷した有価金属のリサイクルは、日本のレアメタルの自給向上と国際供給リスクの低減に貢献しています。日沿道は、秋田港など廃材等原材料の集積地と県北の環境・リサイクル企業所在地とを結ぶルートとして、また、互いに連携して事業展開している県北の環境・リサイクル企業所在地間を結ぶルートとして、県北のリサイクル産業の発展を支えています。

### 3. これからの日沿道開通を最大限活用した地域展開方策の立案、実行に向けて

#### 3. 1これまでの開通効果の整理分析結果から見える地域展開方策の方向性

・開通沿線地域の変化を見れば、産業面や広域観光面で特に大きな変化が現れています。今後の日沿道の開通を見据え、特に産業面や広域観光面で県北地域が連携して施策や取り組みを展開し、これまで以上に大きな相乗効果の発揮を目指します。

このとき、

- ①地域の特性や資源を武器にする(水や風などの自然条件、地場産業、JAXA 能代ロケット実験場の技術、産業出荷額が県内で唯一減少していない県北地域のポテンシャル)
- ②あらゆる階層で連携して取り組む(県北地域内のみならず近隣県・道を含めて)

### ③能代港や大館能代空港も含めた県北社会資本ストックを総活用する

ことで、「企業がここに進出したい理由」や「観光客がここに来て滞在したい理由」を生み出していきます。

- ・また、日沿道開通地域では、通勤通学や買い物といった日常諸活動の広域化が現れています。このことは、例えば、日沿道開通により、秋田県のセールスポイントである教育を武器に、「子供は秋田県、親は単身赴任」というような新しい住まい方の提案も可能になることを示しています。定住人口や交流人口の拡大にも着眼していきます。
- ・今後の意見交換会では、上述のような着眼のもとで、日沿道開通を最大限活用した地域展開方策の立案、実行に向けて取り組みます。

## 3. 2既に始まっている新たな地域展開

実現を目指して始まっている新たな展開が既に県北各地にあります。

### ■『エネルギーのまち』の構築(能代市)

- ・能代市では、再生可能エネルギーのポテンシャルを活かして、「エネルギーで活力をつくり、エネルギーを自給できる『エネルギーのまち』」を目指す中、再生可能エネルギーで災害時でもとまらない電力供給システムを構築して安全で安心して生活できるまちづくりにも取り組もうとしています。今後の日沿道の開通を見据えると、「災害時でもとまらない電力」+「日沿道」+「能代港」+「大館能代空港」をセットにして安全性信頼性と利便性を兼ね備えた事業環境としてセールスを行うことにより、新たな産業創出や企業立地につなげていくことが可能となります。

### ■東京オリンピック・パラリンピック授与メダルへのリサイクル回収金属の活用提案(大館市)

- ・平成27年5月、小型家電リサイクル法で定める認定事業者が所在する東北3市(大館市、八戸市、一関市)で、リサイクル回収金属を東京オリンピック・パラリンピックのメダルに使う提案を3市連携して国や組織委にしていくことを決定しました。このような提案は、日沿道をはじめ、北東北三県での広域回収を支える道路ネットワークがあるからこそ可能な展開です。

### ■新たな企業進出・設備投資の受け入れ環境整備(工業団地拡張)(大館市)

- ・企業進出や設備投資が続く大館市では、平成27年2月に大館第2工業団地が完売となり、隣接3工業団地(合計 100ha)がすべて完売しました。大館市では、平成25年度より大館北 IC 隣接地にオーダーメイド方式で釈迦内産業団地の造成を進めているほか、秋田県でも、平成25年度より大館・大館第2工業団地の拡張(23 ha)に着手しています。

### ■台湾からの誘客への取り組み(大館市)

- ・大館市の台湾への観光誘客セールスにおいて、「秋田犬」、「きりたんぼ鍋」、「森吉山の樹氷」、「白神山地」など秋田県北部が誇る資源や宝のニーズが高い。日沿道の開通を見据え、あきた北空港を基軸とした観光ルートの提案が可能になるため、広域連携に取り組むことができます。

#### ■定住・交流の拠点化(北秋田市)

・鷹巣大館道路で北秋田市と大館市が結ばれば、大館市の工業団地への時間が大幅に短縮されます。北秋田市に住み、大館市で働くことを見据え、定住促進に向けた住みよい街づくりを進めていきます。

今後、日沿道が繋がれば、あきた北空港 IC に近接する北秋田市民病院で高度医療技術を持つ医師により、県内などの若手医師の育成が可能になります。